

*革ひもの綴じ紐を収蔵

皆さんは綴じ紐といってもピンとこないであろう。和書は糸で綴じられている。天文台に残る明治の頃の書類は紙の「こより」で綴じてある。今はA4の書類をパンチで2個の穴をあけ、バインダーに綴じるのが普通である。

テレビドラマの刑事もので警察の「取調べ調書」がよく出てくる。厚紙の黒表紙の綴りが今でも一般的なようである。天文台でもかつてはこのように書類を綴ったものである。もっとも筆者のいた研究室では出勤簿くらいしか厚紙の黒表紙の紐で綴った書類というものには縁がなかったが、事務部、特に会計課ではそういった書類が山と積まれていたのである。アーカイブ室新聞498号に「台長官舎のカギ」という記事を書き、その鍵束の紐が革ひもであることに驚いたと書いた。

革ひもは非常に丈夫である、鍵束の革ひもは珍しかったが、本来は書類綴りの綴り紐である。その革ひも(写真1)を保管してあったと長く天文台にお勤めのY女史が届けてくれたのである。今や非常に珍しい貴重な歴史的遺産といえよう。



写真1 書類を綴る革ひも

筆者にとっては、革ひもは馴染みのものなのである。筆者は天文台51年生であるが、野球を本格的にやり始めたのも天文台に入ってからであり、グローブの補修に使う革ひもを何度も買って来た。筆者は東京天文台クラブという組織を抜けたことがある。抜けた組織の東京天文台クラブに野球部があり、その野球部では活動を続けたのである。東京天文台

クラブの目的は東京天文台で働く職員の親睦であり、台長初め職員すべてが参加した組織であった。台長も入っているということは、まあ、御用組織である。そこで組合の青年部が職員の親睦は組合の青年部がやろうという運動に与した責任をとって東京天文台クラブを辞めたのであった。組合の青年部による東京天文台クラブ潰しの集会には時の大物教授もやって来てこの運動に反対し、この反乱は失敗したのである。

かといって野球を辞めることはできず、クラブの目的が親睦を目的にしているなら、非クラブ員だって皆と野球を楽しんでもよかろうという論理で昼休みの野球、対外試合にも参加していた。それでも控え目に誰も使わなくなった古いグローブを修理して使わせてもらっていたが、その内、野球部の非正規メンバーであるにもかかわらず、監督をやることになり、そのことに立腹の御仁もいて、「非クラブ員が監督とは！」と表立って非難されていた昔があった。

今でも、野球部の古いグローブの修理を引き受けているのである。革ひもの懐かしさとともに、古い時代の思い出である。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp